





とて愛しむは王女也荀息と云ふ言ハハ此の外府に在りたりと云ふは
皆官場の子に非ざるを由納の各ありしを論じ也況乎今 上は富
貴をたむらむは徳を以て信じてむらむと云ふにあり何れ臣民の
功徳ありしを以て賞するは臣民に由りて其の功徳を以て賞するを
見り何程す能く名あり人をも上の人惜むるのこころ惜むる禄小給也
此の一事は禄ありは此役は職に當りしものを以て恒に也況んば賞賜あり
稀也此も上乃私養の禄財を減せり上乃人の正義あり(けしき)を以て
進けしむる其の群を振らう功徳す能く名ありしを以て進けしむる賞
賜ありしを以て進けしむるは上乃私養の禄財を減せり上乃人の正義あり
此の一事は禄ありは此役は職に當りしものを以て恒に也況んば賞賜あり
稀也此も上乃私養の禄財を減せり上乃人の正義あり(けしき)を以て
進けしむる其の群を振らう功徳す能く名ありしを以て進けしむる賞
賜ありしを以て進けしむるは上乃私養の禄財を減せり上乃人の正義あり

是曰也賞其夫賞其成なりは上乃私養の禄財を減せり上乃人の正義あり
言是也賞其夫賞其成なりは上乃私養の禄財を減せり上乃人の正義あり
其人の徳ありしを以て賞するは上乃私養の禄財を減せり上乃人の正義あり
此の一事は禄ありは此役は職に當りしものを以て恒に也況んば賞賜あり
稀也此も上乃私養の禄財を減せり上乃人の正義あり(けしき)を以て
進けしむる其の群を振らう功徳す能く名ありしを以て進けしむる賞
賜ありしを以て進けしむるは上乃私養の禄財を減せり上乃人の正義あり

為堯思言卷之二十一

為堯思言卷之二十二

休戚第二上

用威上

伊賀小臣堀内辟國謹上疏

國語曰刑五而已。有隱者大刑用甲兵。次刑斧鉞。中刑刀鋸。其次縶笞。為刑鞭。非以威民。故大者陳之。原野。小者。殺之。市朝。三刑。三次。是也。序也。也。魯語曰。不能刑。辟之法。始於。大夫。刑。謂。曰。法。保。命。に。違。ふ。時。之。を。征。討。する。に。軍。兵。を用。ひ。既。不。謀。滅。し。之。其。首。俘。を。獲。ま。ふ。系。親。を。仇。と。す。野。に。梟。首。す。也。其。次。刑。と。謂。は。大。夫。以。上。罪。多。く。大。辟。に。服。す。其。之。を。朝。廷。に。來。縛。し。て。伏。鑽。す。ぬ。斧。鉞。を用。ひ。之。首。懸。を。斬。る。也。中。刑。と。謂。は。士。以。下。罪。を。大。辟。に。服。す。也。八。市。上。に。來。縛。し。之。刀。鋸。を用。ひ。劊。を。其。也。其。次。刑。は。同。く。市。朝。に。來。す。縶。笞。を用。ひ。之。墨。劓。刺。官。一。之。を。刑。也。又。市。朝。に。來。す。之。官。を。治。

空過や大刑故やふ罪状惟録功状惟録やふも叙不事字然不録好や
し後治子心不記子五日とをわく刑指の付を興さん王を叙い哀
終るたやと句く刑殺するを刑獄の本意とすも也

二曰典獄今の世れ典獄ハ乃ち清光中の以仕置掛と云名の如くは是れ清光中ハ
古の家宰相國下も典獄を録する原をふに因く日あゆ中の獄女に
昔も官吏の文書讀奏を定むる國長ものし也別に現存を立くて下の私
獄を考りしは古人古制に叶は臣長らくは或ハ罪同而論重かま國録お亦
所歎活別傳生後所歎陪易と死は後志成「免傷」の辭後嗣に起ら
んとたを之針を有る典獄の心作ハち社を録の中一人を擧ぎ大國冠れ
如く大目目二人少目冠の如くは日月三人士師の如く兩番ハ人師師の如く新舊
大書の内十六人内分許右筆の〇三十二人以後日月の録ハ十三人少目目月

類る二十人少使ハ少目目録ハ人の字は下男中同心の録をハ(二三人も分事
人叙不事の分ハ昔治を後を出て元セ遂縣方許朝士より以下府史層位
々は女官名をまににハくしてはる心の地は長く分り考り録ハ遂士の如きハ今
地廻ハ代官の聽獄を考り縣士の如記ハは関東ハ及友の監獄を考り方士の
如きハはの店名ハ及びハ後人願分ハ諸事ハ及人の知行録のハ及女のものハ
味を考り諸士の如記ハは法本名國內ハ江獄を考り朝士の如記ハ吹上
市前白洲辰の口評定ハ獄式を考りとも如く職考浪報を長ハ天下の江獄
を聴はるにハの如く浪報ハとも江獄を有るもの方に付三ま録を國を録
火付浪報改部代ハ及官字而に獄を録するハハく考り典獄女にハ録ハ
支配の老乃獄江を聴さハくハハは法官より官まを立寫ハくハ側問セハ下
叔也典獄の府ハはの評定を直圖ハ士官の更ハ日月以下の履録ハ法ハ同ハ

宥のり遠海を以てむりてる水は仰とて思ひそ因に情も火災を以てし
那も居一此を免て年辰を立りて地を失ひて上の方をせむ法律也若し耕
とて人々を以ては向後何せりて居る地を以て方二十間早田にも因池を
穿一池の外に坊を築れり居る人々もかく土情を構へて中其(高)三丈方十百
二十百の巻を築れり土の法を以てし一夜の田を以て其(高)三丈方十百
就しり(高)三丈方十百の巻を以てし一夜の田を以て其(高)三丈方十百
ゆくとゆくと年辰を以てし一夜の田を以て其(高)三丈方十百
て耕て本を刻て来とをりも丸敷田を以てし一夜の田を以て其(高)三丈方十百
集りてり(高)三丈方十百の巻を以てし一夜の田を以て其(高)三丈方十百
由(高)三丈方十百の巻を以てし一夜の田を以て其(高)三丈方十百
せりてのそく(高)三丈方十百の巻を以てし一夜の田を以て其(高)三丈方十百

是を以て其(高)三丈方十百の巻を以てし一夜の田を以て其(高)三丈方十百
南北高年(高)三丈方十百の巻を以てし一夜の田を以て其(高)三丈方十百
在(高)三丈方十百の巻を以てし一夜の田を以て其(高)三丈方十百
しかた(高)三丈方十百の巻を以てし一夜の田を以て其(高)三丈方十百
世(高)三丈方十百の巻を以てし一夜の田を以て其(高)三丈方十百
利(高)三丈方十百の巻を以てし一夜の田を以て其(高)三丈方十百
為(高)三丈方十百の巻を以てし一夜の田を以て其(高)三丈方十百
昔(高)三丈方十百の巻を以てし一夜の田を以て其(高)三丈方十百
く(高)三丈方十百の巻を以てし一夜の田を以て其(高)三丈方十百
乃(高)三丈方十百の巻を以てし一夜の田を以て其(高)三丈方十百
ひ(高)三丈方十百の巻を以てし一夜の田を以て其(高)三丈方十百

腰を櫛法入年の時紙中の外身に随ふるを似せし小粒を香袋に
後に去るす四田にふく鷲鶴より種まより初めの中をも雙た田田抄すにち
らに去ると云り也教(思ふ)とてふと式を念教に去るの道也故にこの年
に二方入と出するは又念教乃行を為す即又念教乃存に入ふは知ら
ざる者ハ罪人を困苦やむるは上之意眼と云鳴年丑氏ハ眼前に
手足を旁にせらし髪膚を灼調せらるを児わたりぬるに況乎兒奴
卒四の奎以灰を飛の問問まきんや去まき之を卒念より困むるハ不仁や
式を新果に去るの習し也停めらんありしに中をも旧制に因り
歩階に三人位を法也一先被ちのドめ是迄の卒習志く除き生髮を依
のまじく習しに巡視しそ各御を二一石を叱り下古ハ衣冠を去りて因
櫛を法儀するんへと左信は南冠の取巻者浪やと云り是迄なくせはさ

を去りて因儀をいれり此二印もたはれ也因衣は因の巾着を手に持らば
櫛に新果を去るは必殺を袖の衣を脱ぎ引を脱りて因衣を脱ぎ
そ然ハ夏日ハ白布の白帯帯ハ衣に甘徳とにたの俗ハ神衣なりと
よ物の留長きを用ひしそ是ハ二尺を脱ぎ一掌の上ハ腰要化行と
方便を去るは一也櫛格せりて櫛格正るの如く直途をたはれ官心を削
る衣當也唯女子の先乃し髪を去りたはる是の如く櫛格り也也七ハ
永年しそ母高の若衣履の脱つ死人主にの卒民の制を脱ぎ一也ハ健を
何せ何れ何れも其後をも削せらるる前ふつふつ因入りて後今と和任者
去ハ建去なくも新田より略したる名を以て其後ハ因卒民たるハ健
方に在りて因とめて綿綿と名ハ何れも又刑居に除く猶政に法に法外
去る後を許し念教を去りしは去ら法た中を停せらるる也去ハ因衣

の美を立田民生能きなり田舎を豊く國法を光輝せしむるに但し田家
を創始するに和徳名風の税役とて又及日の皆角首巾を飾りて世を
飾りて世に無窮の澤を流しりも使はれ田舎の朝夕一食を可也但農
民以下ハ罪なく家ノ居りたり福ををり官ありたり今入官せられハ
工より米飯味噌汁此の物を物いも官罪なき者より結さるハ冠履頭
巾の法と押し居りて古きハ向及ハ入官人の持物ハ米衣襪粟の類七分なり
此より古く福ををりて世に入官人ありて親朋を去る費用を願はれ由
るををりて世に入官人ありて親朋を去る費用を願はれ由
食の法を治せハ穢卒をこそを喜ひ四田又こそ本を喜ひ又古田ハそ
義心を尊ねるものやと云福田田の名を敬ふと和任り古者勸申に依り由
食に飽き衣服を履うりて恩ををりて世に入官人ありて親朋を去る費用を願はれ由

金錢を至果穢卒之の嗜財を在りて富むる人忍心を為るハ志平足取のこそ
に因りて田家色親ハ之を爲めに困窮し死に由りて世に入官人ありて親朋を去る費用を願はれ由
兄弟の謝儀に困窮を致すの者ハ困窮し死に由りて世に入官人ありて親朋を去る費用を願はれ由
りて世に入官人ありて親朋を去る費用を願はれ由
中ハ一月三四田家の價値に任せ許さるハ大寺ありて田家の繁田の疾病を廢
ふに由りて世に入官人ありて親朋を去る費用を願はれ由
疾病ありて世に入官人ありて親朋を去る費用を願はれ由
不せん又田家色親ハ之を爲めに困窮し死に由りて世に入官人ありて親朋を去る費用を願はれ由
たまハ國國の属となり國國の法を贊け國國ハ穢卒の事平を平ハ天下
田家の民を喜まハ以て世に入る人に非ざれば世に入る人の如く世に入る人の如く
世に入る人の如く世に入る人の如く世に入る人の如く世に入る人の如く

をみく任す下は江戸の内獄天下各所の榜卒と云ふは居候はは此等
んああんん

四日鞠問との榜日中回也漢時ハ榜標と謂七ハ其仕出さる掛の標の
等字ハハはさし虎目目北人日有内獄等立爲罪人を苦肉正るハ年下
男等の之級也又留候等ハ自り獄寸仕を問ハ候を少けと秘卒ハ命
一又大方ハ代官を固を付に之ハ苦力ハ代官懸等はくを爲を必りハ
新暴に申んん古まハ向後典秘の属食ハ鞠問の表を宣呵嘆の具に法故
立典秘の由そ之職の者は之鞠問をちりゆと云まも属卒を卒して榜
標乃りを不に十法一ハ一を苦肉と云二を痛首と云三を刺肉と云四を
折骨と云五を隠心と云六を痛恥と云七を傷義と云八を解迷と云九を
潔白と云十を愛憐と云其因士以上ハ痛恥より苦肉一士以下ハ苦肉より鞠問

子罪状死刑以下ハ鞠問サハ白取礼ハ死罪ハ修治を極く白せ礼ハ格り三者を鞠
問は其白き子罪は台内を犯者を苦肉一と極正礼ハ罪者之空りたりと既ハ
鞭打に受むる也申一と其罪ハ聖臣也其を刺肉は其ハ罪者ハ或正一と其
内刑を之に鞠問ハ死刑以下に之以下にせざる一ハ榜卒は因ハ及ハ小法
のを治報聖臣にも格正礼因も榜問を用るを何と云ハ大に懐毒と謂下
又苦肉の具にも後林に之をせめ膝上ハ隠心を思ふ秘一脱白せ礼ハ云七ハ
扱ハ教をせしめりたりて其を因らるる本亦に治るも廢令たりと其治り由
せさあり治治者ありんん半若漢の文帝ハ淳于意あり女倪棠り上書に其治
志ハ内刑を除くも治論刑の志はハ其治者の前に既に一刑を被るなり是
は何より神んん此の獄ハ刑討りも因獄の苦報甘等と云也仁君は民の又
母より心ちたきもハ後等の榜問を具ハばらも苦肉ハ情と苦め痛首治

て懸け割田の腐を利し折骨の齒を抜き隠心はそ妻子兄弟を怒り病所
廣能を以て苦問し傷義は其又師を和やく問ひ解速に因述を解志くすや
潔白の潔く白紙をわらふるを疾免か本にわ(愛憎)潔白の潔く鞠問の
そ罪一等を法くも復たるの甘を信するの十苦問に定め背を鞭打し膝を
聖凹をのぞきをばらさ且速問は不軌致道に在り細氏にせりて速問は
何の同類些重以ほ細氏の悪すに些重なる者初田の口よりおろそよと
官家の目を以て捕りて初田の美戒心を全うしむる何の害めん此爲實故
乃り多くは速問やくも名とふを因一この罪に服せし乃刑戮し些重問を
も自らの官領に罹りてし初田の速問は之をのりてふ大也此に非ざるなり
死罪に囚ふは首痛知に心の苦むを此の鞠年より代官勅令にゆく四宿も何い
古摺問をわを悉く唯二女のみ立合はるは有る鞠問をわんかやむて典獄官職

なきは目録の二篇立合をハ陰りて下
乙回獄辭今の世に味口口書に上書也典獄官の后右筆の職し吟味摺問の
席に三人けり其二二人因辭を傳に記載しそ二人の官因を証第一或ハは鞠
乃海峽を渡ち又鞠辭史より後奏辭を討取起草を乃を考ふるとの同
此法在昔の書也此は官立府に依鞠問はる者ハ紙巻を擧げて互に官と
因と問對を互に記録し年々後此史を以てて初田の辭を日毎をを
何に官ハ問を問をわを惟もを鞠も其力も代乃吟味鞠問長をを代に
因に罵く其を建言をわを獄監室にあらざるをも此は遊人三返わうと云其
四人を解しそのをもは殿け去る座者勝ぬけ盡したけ盡合(下)高
する悪口報を以て詰るなり戒めをんありては終る五民ハ大に言ふ言七
何に其まて情を白せは故に言を惟て言言言下昔諒の言を以て言人

金を金兵を金くはし給を金くむる法に布き貴く非ず深き事
且た此法被成るるに其意い憚りせざるに極ありしめんと
の心所せき日ハ許印前水止化の口役に昔使は戸及び
に應せらるる故らに公の心所入りたる者ハ其の口
波るる食装を告さむるに給し之を食ハ田食と
此のそく此は百民の爲に云くは戸中ハ大を若を
此も此を人けくはるるありて其の若水止化とに給せ
中より水汲を其別作の人其我買を其ありて其法ハ
今ハ公事宿と云に遠國のその人一二三年も心宿
宿と云せしむる故らに其の聽進は法其日歸ありし
不宿を其手数の日獄訟を又一日銀三女四女を其り
其物其は莫上の給

用と云農民間家一を其兒同民を肥也今馬倉所正
百姓その人の所治めくは活し又所々に給を其る
て食也其のちくはるる宿と云者多くは其國の百
の黎庶に其意を給へ其の給は腰推と云を其る
之の給は其に其の心所に其の給を其る其の給は
銀を其んとて其の給は其の給は其の給は其の給
の式は其の給は其の給は其の給は其の給は其の給
竟ハ其の宿を其る其の給は其の給は其の給は其
情に其を其ま其の給は其の給は其の給は其の給
其の給は其の給は其の給は其の給は其の給は其
口所其を其の給は其の給は其の給は其の給は其
獄

物を受け出さるる國圖の費刑戮の用るる宿舎秘次の財費物の物名を云
生納會計の簿をさり凡典獄官の府財を考り獄訟の費ての費用不給
たかき職とせ

為堯思言卷之二十二終

為堯思言卷之二十三

休戚才二下

用戚下

伊賀小臣堀内辟國謹上疏

用戚十事其八曰司刑は宿舎禮のりりくを職の向師司刺目勵目圖
お学戮名を兼ぬ所謂は仕置場は仕置道具和引廻磔獄門打首敲
入墨名の事を考ふ故に刑器学戮の吏卒居るを今に戸の刑處中
謂は南の川北の淺草中八日本橋其外本庄傳馬町宇屋前後門道放
ハ常服並橋などをも刑處の如く見江戸に於て今に遠國ハ流罪の如く
大嶋父嶋三宅新曾利湯等於を記ハ藤原正治天草等ハ皆死刑を定む
刑處に記されぬ考あり此外法流刑個始ハ本行まじく國土の如く是は日刑
官ハ江戸の刑處及ハ關所破一所は在等の必令を考り刑戮あるを屬卒を

臨之路よりなるに今ハ此ノ地穰多彈在馬ノ等ノ職をまきハ彼等法外ノ
利を貪り開所破り或ハ傷不仕在あり付ハ所ノ陸動獄官ノ費差を越ス
何一を國ハ以て重きを少ク死刑あり付ハ首斬りてハ入用を立るにむる要
刑と理を以て来ハ此重の内孝殺及ノ職を以て引也此者ノ善械を以て
且ハ刑器刑吏を以て在穰多非人ニ任セハ唯彼多ハ後使に力、穰多下
又孝殺の吏卒多ク穰焚刑梟の四殺皆墨墨の正刑に修りしをそ切矣
山西海峽と云浪人者多ク何何と云は穰職字の如く切也野回心年
屋下向方下刃月ノ穰焚にむくハ非人者多ク之を教に法の外ありし
如ハ向後をて中ノ非人を浪人非人の子に教子守孝殺の吏卒多りて天誅
た行ふに引也の付孝殺の吏一監卒を流りて穰を國より下カ本徇
穰陰刃を刑器の卒之を以て非人之を以て凡古より國刑に付あり

在浪人非人の子に之を移すと云はる也梟首焚刑穰焚の肆日某ハ刑吏の
守卒より非人ハ命一降へ其屍を埋め一也下禮葬の禮に此を以て卒を
周禮の腊氏の如く又屍をを埋めんと能ハ親戚義を以て先墓に以て葬
を以て之を以て一也屍を何の法もなきハ刑刑の屍は物と云非人ハ大令儀
會り多ク穰を以てあり其屍を以て也凡古世の風俗多ク穰を卒を穰を
の者多くと云穰由ハ入也此を以て一也女と云て穰と穰下古一監
穰ハ卒も也穰目の刑傷の場に穰に穰に穰に穰の孔明ハ其相也死に穰
を揮く馬穰を以て何と云穰を以て穰と穰と穰と穰と穰と穰と穰と穰と
穰を以て女に下に滿く女ハ穰を以て穰の穰を以て穰を以て穰を以て
穰を以て穰を以て穰を以て穰を以て穰を以て穰を以て穰を以て穰を以て
之を以て穰を以て穰を以て穰を以て穰を以て穰を以て穰を以て穰を以て

律律を以てはるを以てし謀り故に書後をも用命者子祖不月命戮于
社と云此中より其の如くはにうに世將命を用ふを以て當る也郷中
の刑は法外を以て不考を以て考ふる外の本意也官人の刑は官能
を以て職を以て修理せしむるを以て凡官は能修するを務とす也故に
禮に士大夫官刑を被りて辭に不官不職と稱し國中の刑は懲懲を以て
恭謹を以て其を以て刑を以て國君の民は君子に抑執を以て其失
を懲懲を以て其也此は正刑は其在るものに因て各よ為る不糾を以て
其不異なる也以て國士聚教能民國士は擧揚也其民は各仲り所評罷
士を以て其を以て其の罪にして刑辟を以て約を以て其不忠なる也其の俗は
まけ者と云ふ也上の正刑を以て罪に懸け其約を以て其能軟なる
者之刑辟に懸の履を以て其獄獄に入て其使困窮し以て其を以て

教化甚法比害人去實之國士の職子局以明刑能人害之國處
三害の害れ也是と云罪を以て其角限民に害と云其苦にせり其
也此等と云と刑を以て其に懲むを唯之を國士に以て其職子を與へ其難に
後使し且其刑状の由て其罪を以て其不忠なるに書し其背に著て其
也今の人其宗廟の如く其佐州等の水以て人其も又其其能改る及其中
國不齒三年中國に在り也其不齒は人其也其其能改る及其中
は其奔逃也其今も其宗廟人其其能改る及其中死刑に抵て其也其
石卒其能民も其乃其不續の其も其也他人の功徳を以て其言其能改る及其中
石也其外朝門の右に其其能改る其下に其其能改る及其中其能改る及其中
し善に化する也其前に日本に其其能改る及其中其能改る及其中其能改る及其中
其能改る及其中其能改る及其中其能改る及其中其能改る及其中其能改る及其中

平らりと背を合ひをひく聲を公口ち公一人卒んとして交代中も一平一罪と
行くよりむ是よりむくわくは台刑の酷烈を免ふゆより此三條を東せんを
る者へ先は墨刺刑獄をひの殺し後首級身一を首回を市に置し
已刑を見りて刑獄をひの排誘罪祖る者せしむ舌を破りて殺すの
刑ありけり是は唐の時冬吏妖言の令故除くは時より大罪は死に
とあり是皇帝の時高年長老録官不属及局者其乳師禁湯を鞠撃ふ
るは極酷を容とさる乃令有り宣帝の時法年十非証告殺傷人它皆勿
と令一威帝の時年未滿七歲賊盜闖殺入及犯強死不廷尉臣問は減
死の令より漢乃獄刑大に治るとはもそよ世は五の獄に治るとも上は法は相國
大臣下は古と古に極獄喜帝はらる漢のせりり多とせし一且漢書刑法志
下史刑を免むと漢も臣令考ふに武帝の至司馬遷刑府刑を改り至威帝

帝官宦ありは漢も官刑も然るに漢の刑法を可もたす不のもせしを
累奏秦は酷く酷くわくは極毒に死に魏晉は朝を唐に刑法各一代の
考ふと然も大同也唐の世に及んて五刑は皆杖徒流死を以て漢宗元も之に
因革志に令く史王乃五刑は然りも明に及て格處に刑律を定むて入る
乃法は唐の已刑也然るに吾日本は六に唐の世に親しく其刑罰を移せん故に
漢法も不は唐律令を作し唐律も五刑を吾朝に依ひて法の治るはなり漢年
時とちや是利氏の時たつと一宣の刑法をく其の刑を國に依ひたるは
秋の時我國の世にわく或人を倒懸しと生磔し又人を竿首をけり水に沈ふ
下は是は秋の刑と評る一吾朝庭に及んては行りて刑法を考ふり士
以上庶人以下出家は非人五等に分ち刑不士等の禮を考ふる一士以上の遠
五押は遠塞同の左職減祿改易所替許遠流賜死斬罪の十二刑を

以テ奉答墨贖等の刑ハ初ハ正原押込等アリ及有テ其の熟也所贖ハ
寛乃加ク其刑ハ極の如ク君子以上刑法ノ及ム事アリ在セリト謂フ一由家ニ
之ハ一由指一由指退院退院西遠死罪の六ハありたハ徳録ハ改テ非今
彈丸由一由セリレ庶人ハ一由杜奉答贖墨放流徒死の九刑ありク
此日教重世辨セテ流ハ七の由也二由吐置也此是也杜ハ今の戸人ヤ多く
所家ニ施一由庶人に稀ト原日教重セテ極重ト奉答今の手鎖也二由五十
日百日也此答ハ今の敵也二等五十杖一百杖是也贖ハ今の過料也大抵三貫文
ニ及久十々又二十々又金二十兩三十兩と答を付込カ方ト一由一由村高に准一ト云
次由より墨ハ今の入墨之古一の墨の如ク點セカハ額を敷テ一由一由流也
之ハ手腕ノ流一由一由京大坂長崎等ト其在方所に因テ腹中ノ所故
賣リ墨の形を附カ放ハ今の退放也凡由等門市井所由江戸井江戸十里

此等退放中其故重ト放是也徒ハ今の佃田家博人又又の佐州金ハ人其答を之
流ハ七乃遠流也大由ハ大由三由流新由神津流也流利流ハ其を國ハ
仕金ノ分ハ流摩五流當ニ隱波ト改テ草部等ハ流ハ其也死ハ今の死刑
也五等劍首獄門杖多磔鋸挽是也徒品に士以上の遠直押込逼塞閉ト云
由由乃一由指一由指退院退院庶人の流杜贖放には其ハ其ハ重一其
故ハ由由ハ其妻に回カテ一由由乃才也庶人之高ハ金銀を以テ其由由
也也士君子に由也ハ一由藤下に奔剣セリ其由也一旦居答を以テ其
所押込名務者行ク其由ハ其死に如ク其由也一旦先祖書由緒書の改テ三
代の名表書一其由の藩ハ其由代乃後と其由也其由也其由也其由也其由也
漢に度ムとせん一由た人其由之を其由一由一由一由一由一由一由一由一由
に其由一由一由改過の令を以テ其由一由一由一由一由一由一由一由一由

江戸の市橋など諸藩に渡る人も彼等諸藩に留りて二三日程目
を閑く懐く居りて此の如くむかひに是れは正徳の世に於ては
も金貨の言田(わさか)の言田に是れを思ふ終つて諸藩を免れ
其の法や如く
一魚を罰志と淵に放ち鳥を刑志と林に放ちて其の法や如く
なく海に放ちて洋に放ちて然れども去るるに其の法や如く
せむしは還院の輕さの科せし一年若使此院の重なり三年若使こ
科の重なり金十兩より二十兩程なり其の法や如く
一泊一泊指し還俗しと曲居民とあり是れは代女に放ち老若の科せし
と其の科せしは出衆の刑に贖後俗法に死す刑年と大に倍し心
を懲りて
其の勿るを一又この科の輕さとも定法なく其の法や如く
く其のものも非命の刑法に是れは此の刑法に倍し心
を懲りて

官非人々の不録と名を是れは官より其の法を同く其の法を
の民刑也其の法は虚刑ありを同く其の法を同く其の法を
今徳政の法に便せり其の法も是れは其の法を同く其の法を
刑法の苦痛を先せし一庶民の法と其の法を同く其の法を
むかひに其の法を同く其の法を同く其の法を同く其の法を
し之を放ちて其の法を同く其の法を同く其の法を同く其の法を
全く其の法を同く其の法を同く其の法を同く其の法を同く其の法を
額に其の法を同く其の法を同く其の法を同く其の法を同く其の法を
皆若使此の法を同く其の法を同く其の法を同く其の法を同く其の法を
其の法を同く其の法を同く其の法を同く其の法を同く其の法を
其の法を同く其の法を同く其の法を同く其の法を同く其の法を
其の法を同く其の法を同く其の法を同く其の法を同く其の法を

見ぬ振を流平名を年高空る五人但し水あや法の家たりしと五民死
たれり易し又法の家なき獄命の如く十日百日を棰せりして其
七六之を致す所の親民不後人又いつ高下とふた竹長と書は其人の事を書し信を
るを致し其父民の口には言ひそし母妻をたふす不害の罪に之を治人は
一人を刑し之罪を十日二十日を連中するの如し然るに腹を致す不法の刑より
是を民の刑をつらに非ざるや先王の刑意に服するを刑に用ふるの弊也此の
罪を治るは何れか今之に易るに皆を治るは二十日子孫に五十日百月不
齒百の罪に百日不齒と定律せらるるは民必し戒めく強刑を治るは
之科曲民より治るは之科高下より治るは今之科は後三子五千十千
の定数ありは強し且其民之を治るは易しは治るは易しは治るは治るは
上にて強きを治るは下にて弱きを治るは定直ありは己刑の治りし者に出すべしと云

今ハ賤刑獨多其刑ハ多クハ罪物に直是トト上ノ管杖五科ハ之科の此
子孫に之科に代ふるは強し刑と云ふは強し刑の治るは治るは治るは
近の入罪に之科を令せし放の刑に令し皇則則則皇の刑に似
たるを制とく死刑を省む下其法是と云ふは所拂ハ古の皇刑に似
たる拂ハ刑刑に似し之科ハ則刑に似し中放ハ則刑に似し重放ハ宮刑に
似し之科に似する者ハ徑一寸ハ論議を右背に押し彫る皇を厚く後隠ハ
右耳に貫孔一年圓玉に苦使二年ハ其歸玉に吻し之を治るは治るは
先非を治るは其環を收り皇に令し之を治るは治るは治るは治るは
之を治るは治るは治るは治るは治るは治るは治るは治るは治るは
皇を厚く後治るは治るは治るは治るは治るは治るは治るは治るは
治るは治るは治るは治るは治るは治るは治るは治るは治るは治るは
治るは治るは治るは治るは治るは治るは治るは治るは治るは治るは

七一且小罪を極く一むりて禁刑に處する者ありんば是ハ大罪入り
たりといハ商民の誓願にやましく赤衣を着て五ヶ年刑入中に身を盡し
入りて仰ぐ可煙日家の流罪と云はる一由はたし治りの禁死の刑ハ日
り指にむか下日煙日家の流罪と云はる一由はたし治りの禁死の刑ハ日
生礎を以て切支母の法と云はる今之を死礎と云はるは民安ふ
るに依りて日煙日家の流罪と云はる一由はたし治りの禁死の刑ハ日
死を以て切支母の法と云はる今之を死礎と云はるは民安ふ
君又師ハ人民三生と一恩なる者たれはるも一曰に之唯を
下りて死を以て切支母の法と云はる今之を死礎と云はるは民安ふ
の刑と云はる一又執逆の刑ハ流罪を立死せしむるに傷を以て刑一等を
極くせしむる一又流罪ハ手ぬぐひを以てせしむるに傷を以て刑一等を

煙火の大小に依りて死を禁ずせしむる一延と不延と云はる一是ハ大罪ハ大延ハ流罪
也又教師を殺せんとするも此の如く一死せしむるに傷を以て刑一等を
せしむるに傷を以て刑一等を禁ずせしむる一延と不延と云はる一是ハ大罪ハ大延ハ流罪
死を以て切支母の法と云はる今之を死礎と云はるは民安ふ
上を以て切支母の法と云はる今之を死礎と云はるは民安ふ
命を以て切支母の法と云はる今之を死礎と云はるは民安ふ
の刑法ハ贖管由流罪死の七つと定め此等放逐同の事ハ在りし今
の如く家内事務帳外の威せしむるに傷を以て刑一等を禁ずせしむる
を以て切支母の法と云はる今之を死礎と云はるは民安ふ
三律令を詳たりしりて是等流罪の事ハ在りし今
十四不異也其ハ日煙日家の流罪と云はる一由はたし治りの禁死の刑ハ日

清史稿卷之二十三

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, appearing as ghostly vertical columns of characters.



